

自己卑下呈示行動尺度作成の試み

上拾石 直人¹ 稲垣 勉^{2,3} 澄川 采加³

¹愛媛県福祉総合支援センター ²教育テスト研究センター ³鹿児島大学

本邦において、これまで自己卑下呈示についての研究は多く行われているが、自己卑下呈示が実際にどのような行動として表れるかという点を検討したものや、自己卑下呈示をどの程度行っているか、すなわち自己卑下呈示の使用頻度について検討している研究はみられない。そこで本研究では、自己卑下呈示行動の頻度を測定する尺度を作成した。予備調査において、半構造化面接を行い21項目の予備尺度を作成し、本調査では大学生および大学院生177名に回答を求めた。種々の解析の結果、最終的に18項目・3因子からなる自己卑下呈示行動尺度が作成され、各下位尺度は一定の内的一貫性や妥当性を有すると解釈された。今後の課題として、実際の行動との関連なども併せて検討し、多角的に妥当性を検討することが挙げられる。

キーワード：自己呈示、自己卑下呈示行動、尺度作成

1. 問題と目的

私たちは普段の生活の中で、自分自身を卑下しながら他者とコミュニケーションを行うことがある。たとえば、あまりテスト勉強を行っていないと公言している友人からテスト勉強の進捗を聞かれた際に、「自分もできていない」と答えることで相手に合わせてみたり、自身の能力や成果を他者から賞賛された際に、「たいしたことではない」と応じたりするなどの場面は想像に難くない。

このように、「日常生活の様々な場面で、自己の否定的な側面に言及したり、優れた側面について積極的な言及を控える（吉田・浦・黒川, 2004, p.144）」といった振る舞いは「自己卑下呈示」と呼ばれ、本邦においても多くの研究が行われている。たとえば吉田・古城・加来（1982）や村本・山口（1994）は、自己卑下的に振る舞う人物は他者から良い印象を得られることを示している。そして、樋口・川村・原・塚脇・深田（2007）は他者からの賞賛に対して自己卑下呈示的に振る舞う人物は、社会的に望ましく、個人的に親しみやすいが活動性が低い人物とみなされることを示している。また、石黒・村上（2007）は被呈示者との関係性が自己卑下呈示¹に及ぼす影響を検討し、関係性が近いほど自己卑下が生じにくく、関係性が遠いほど自己卑下が生じやすいことや地位関係によって自己卑下の生起率に違いがあることを示した。

上記に加えて、原田・林（2017）は、日常での自己卑下呈示が、多くの場合は相手からの側面について褒められ返答する場面において観察されることに着目し、属性（優しい）と能力（頭が良い）に対する賞賛の違いによって自己卑下呈示の生起に違いがあるか否かを検討した。その結果、同性よりも異性から賞賛される場合の方が自己卑下呈示が生じやすいことに加えて、属性に対する賞賛よりも能力に対して賞賛を受ける方が自己卑下呈示が生じやすいことが明らかにされた。

¹ 石黒・村上（2007）では「自己卑下の自己呈示」と記述されているが、本研究で扱う自己卑下呈示と同義として扱い、本論文では「自己卑下呈示」と統一して表記する。

自己卑下を対象とした研究において使用される場面は、原田・林（2017）の研究のように属性や能力を賞賛される場面が取り上げられることが多い。しかし、こうした受動的な場面に限らず、たとえば会話のきっかけとして「自分は〇〇ができないのだけれど」といった自己卑下呈示を伴う話題を挙げるといった場合も想定できる。このように考えると、自己卑下呈示は日常のコミュニケーションにおいても様々な場面で用いられていると推察できるが、実際にどのような行動として表れるかという点を検討したものや、自己卑下呈示をどの程度行っているか、すなわち使用頻度について検討している研究は見当たらない。

そこで本研究では、まず自己卑下呈示行動にはどのようなものがあるかについて予備調査を通じて収集する。そして、予備調査の結果をもとに、自己卑下呈示行動を普段どの程度行っているかを測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。信頼性の検討には内的一貫性を指標とし、妥当性の検討には自己卑下呈示行動と一定の関連が予想される相互独立的—相互協調的自己観尺度（高田・大本・清家, 1996）、自尊感情尺度（山本・松井・山成, 1982）、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島・太田・菅原, 2003）、社会的スキル尺度（菊池, 1988）の各尺度との相関関係を指標とする。

妥当性の検討に上記の尺度を挙げる理由は以下のとおりである。まず相互独立的—相互協調的自己観尺度についてである。福島（1996）は、人と人が根本的に結びついていることを望ましいとする相互協調的な日本文化（Markus & Kitayama, 1991）では、他者との関係性の崩壊が自己にとって大きな打撃となるため、関係をないがしろにするような自己の優位性の表明が避けられ、人々が自己卑下に向かうと述べている。そのため、本研究において作成する自己卑下呈示行動尺度は相互協調的自己観尺度とは正の相関を示す一方、相互独立的自己観尺度とは負の相関を示すか、もしくは無相関であると考えられる。

次に拒否回避欲求尺度についてである。Leary（1996）は、相互作用の中で自己卑下呈示は相手から好まれるとしている。これは、自己卑下が関係に配慮しているサインとなることがその要因のひとつとして挙げられる（e.g., 村本・山口, 1997）。また、石黒・村上（2007）はこの議論を通じて、自己卑下は相手が自己を高く評価したいという欲求を考慮して、それに脅威を与えかねない自身の高い自己評価を控える行為として位置づけることができると述べている。このことから、他者との関係に配慮し、相手の脅威になる自己評価を避ける自己卑下呈示行動と、他者からの否定的な評価を避けようとする拒否回避欲求は正の相関を示すと考えられる。

続いて、自尊感情尺度および社会的スキル尺度についてである。吉田他（2004）は、低自尊心者が高自尊心者よりも他者から好意的な反応を引き出すための自己卑下呈示を行う理由は、彼らが積極的な自己呈示ができず（Baumeister, Tice, & Hutton, 1989）、かつ高自尊心者よりも他者との関係性に敏感であるために（e.g., Leary & Downs, 1995）、自己の肯定性を高めるために他の方略を用いにくいためとしている。このことから、自己卑下呈示行動と自尊心は負の相関を示し、社会的スキルとも負の相関を示すと考えられる。

2. 予備調査

2.1 参加者 大学院生 2 名および大学生 30 名（男性 12 名、女性 20 名、年齢は聴取していない）を対象とした。

2.2 手続き 参加者に半構造化面接を行い、自己卑下呈示行動の程度を測定する項目を収集した。面接の際の質問項目は、最近自己卑下呈示をしたか、（自己卑下をしたと回答した場合、）その相手とはどのような関係性であるか、どのような状況で、どのような内容の自己卑下呈示をしたか、という 3 つの観点について、参加者の回答に合わせて質問を続けた。

2.3 結果 半構造化面接において、32 個の自己卑下呈示行動が収集された。これらの

項目について、第1著者と第2著者の2名で協議し、内容が重複するものなどを除き、最終的に21項目を選出した。

3. 本調査

3.1 参加者 大学生及び大学院生 177名（男性 65名，女性 110名，不明 2名，平均年齢 20.86歳， $SD = 2.90$ ）を対象に質問紙調査を実施した。

3.2 材料 本調査では、以下の材料を用いた。

(a) **自己卑下呈示行動尺度** 予備調査で作成した21項目について、その使用頻度を5件法（1: 全くない～5: かなりある）で測定する尺度を用いた。

(b) **相互独立的—相互協調的自己観尺度** 高田（2000）による短縮版を用いた。相互独立的自己観尺度は6項目（例：自分でいいと思うのならば，他の人が自分の考えを何とおもうと気にしない），相互協調的自己観尺度は4項目（例：人が自分をどう思っているのか気にする），計10項目からなる。回答は5件法（1: あてはまらない～5: あてはまる）で求めた。

(c) **自尊感情尺度** Rosenberg（1965）の尺度を山本他（1982）が翻訳した，10項目からなる尺度を用いた（例：少なくとも人並みには，価値のある人間である）。回答は4件法（1: いいえ～4: はい）で求めた。

(d) **拒否回避欲求尺度** 小島他（2003）が作成した，9項目からなる尺度を用いた（例：意見を言うとき，みんなに反対されないと気になる）。回答は5件法（1: あてはまらない～5: あてはまる）で求めた。

(e) **社会的スキル尺度（KiSS-18）** 菊池（1988）が作成した，18項目からなる尺度を用いた（例：他人と話していて，あまり会話が途切れないほうですか）。回答は5件法（1: あてはまらない～5: あてはまる）で求めた。

3.3 手続き 質問紙の配布は，講義時間の一部を用いた一斉配布や，直接手渡しするなどの方法を用いた。調査の実施にあたっては，調査への参加は任意であること，調査への参加の有無によって，受講している授業の成績や評価に影響することは一切ないこと，回答したくない項目には無理に回答しなくて構わないことを質問紙の表紙に記載した。その上で，本調査への協力について同意する者のみ回答するよう求めた。なお，他にも心理尺度を実施しているが，本研究の目的とは異なるため，報告は割愛する²。

4. 結果

4.1 データの処理 本研究では，すべての分析において，回答に欠損値がみられた場合はペアワイズ処理を行い，得られた値に基づいて報告を行う。

4.2 自己卑下呈示行動尺度の因子分析および各尺度の得点化 自己卑下呈示行動尺度の21項目に対して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。すべての因子に0.35以下の負荷量を示した項目と複数の因子に0.3以上の負荷量を示した項目を削除した上で，同様の因子分析を繰り返した結果，表1に示すとおり，18項目の3因子構造が得られた。なお，削除された項目は「相手に『○○はどう？』と自分のやっていることの出来栄を質問され，『良くないね』などと答える。」「相手に質問され，『頭良くないから分からないな』などと答える。」「相手にアドバイスや指導をする際に，『自分もできないけど』などと言う。」の3項目であった。

² 本論文の調査は，澄川・稲垣（2019）で用いている複数の心理尺度と同時に，1つの調査質問紙において実施した。

表 1 自己卑下呈示行動尺度の因子分析結果

	1	2	3	M	SD
【因子1:賞賛・依頼への対応($\alpha=.86$)】					
10. 相手に「君〇〇を頑張ってるよね」と言われ、「そんなことないよ」などと言う。	.764	-.054	-.124	3.82	0.98
3. 相手に「〇〇を頑張ってるよね」と言われ、「そんなことないよ。あなたの方が頑張ってるよ」などと言う。	.723	-.125	-.023	3.88	0.92
21. 相手に「君〇〇が上手だよ」と言われ、「そんな上手くないよ」などと言う。	.702	-.013	.077	3.74	0.93
12. 相手に「〇〇がすごいね」と言われ、「あなたの方がすごいよ」などと言う。	.635	.010	.013	3.51	1.09
15. 相手に「君ならすぐできるよ」と言われ、「そんなことないよ」などと言う。	.632	.029	.063	3.70	1.02
2. 相手に「君〇〇がすごいね」と言われ、「たいしたことないよ」などと言う。	.603	-.009	-.063	4.07	0.86
7. 相手に「〇〇がうまくできない」と言われ、「自分の方ができないよ」などと言う。	.515	.123	.206	3.64	1.13
16. 相手にお願いをされた際に、「自分なんかで良いんですか」などと言う。	.459	.183	-.056	3.41	1.19
19. 相手に「君〇〇が進むの早いね」と言われ、「そんな早くないよ」などと言う。	.432	-.021	.231	3.60	0.97
【因子2:会話のきっかけ($\alpha=.86$)】					
9. 会話のきっかけとして、「〇〇ができなくて...」などと言い、話し出す。	-.020	.944	-.152	3.13	1.16
5. 会話のきっかけとして、「自分〇〇をしてなくて...」などと言い、話し出す。	-.035	.837	-.005	3.33	1.20
14. 会話のきっかけとして、「〇〇が得意じゃなくて...」などと言い、話し出す。	-.107	.745	.083	2.81	1.05
20. 会話のきっかけとして、「自分〇〇が下手で...」などと言い、話し出す。	.005	.643	.170	2.93	1.14
17. 自分が相手に対して「〇〇がすごいね」などと言った後に、「自分にはできないよ」などと言う。	.294	.486	-.061	3.05	1.14
【因子3:相手への同調($\alpha=.71$)】					
13. 相手に「〇〇をしていない」と言われ、「自分もしていないよ」などと言う。	-.099	.095	.705	3.94	0.96
8. 相手が「〇〇が難しい」と言った際に、「難しいよね」などと同調する。	-.015	-.092	.671	4.45	0.68
4. 相手に「〇〇ができなかった」と言われ、「自分もできなかったよ」などと言う。	.046	-.050	.659	4.18	0.80
1. 相手に「〇〇は進んでる?」と進捗を聞かれ、「進んでないよ」などと答える。	.070	.102	.390	3.61	1.04

注) 項目の左に付した番号は、予備調査を経て作成した 21 項目の通し番号を指す。

第 1 因子は 9 項目からなり、「相手に『〇〇を頑張ってるよね』と言われ、『そんなことないよ。あなたの方が頑張ってるよ』などと言う。」や「相手に『〇〇がすごいね』と言われ、『あなたの方がすごいよ』などと言う。」「相手にお願いをされた際に、『自分なんかで良いんですか』などと言う」などの項目から構成されていた。相手から賞賛や依頼を受けた際の返答としての自己卑下呈示という特徴がみられるため、第 1 因子は「賞賛・依頼への対応」因子と命名した。第 2 因子は 5 項目からなり、「会話のきっかけとして、『〇〇ができなくて...』などと言い、話し出す。」や「会話のきっかけとして、『自分〇〇をしてなくて...』などと言い、話し出す。」などの項目から構成されており、会話の始まりに自己卑下呈示をするという特徴がみられるため、「会話のきっかけ」因子と命名した。第 3 因子は 4 項目からなり、「相手が『〇〇が難しい』と言った際に、『難しいよね』などと同調する。」や「相手に『〇〇ができなかった』と言われ、『自分もできなかったよ』などと言う。」などの項目から構成されており、相手が話したことに対して同調することによって自己卑下呈示をするという特徴がみられるため、「相手への同調」因子と命名した。これら 3 下位尺度を含め、各下位尺度得点を算出した。

その他に実施した尺度についても、逆転項目があるものはそれを処理した上で相加平均を求め、各尺度得点を算出した。いずれの尺度も、得点が高いほど、当該尺度名の傾向が強いことを示す。

4.3 自己卑下呈示行動尺度と他の尺度との関係 自己卑下呈示行動尺度の 3 下位尺度の記述統計量と、他の尺度との相関係数および記述統計量を算出し、表 2 に示した。相関分析の結果、自己卑下呈示行動尺度の 3 下位尺度間にはいずれも有意な正の相関が認められた。また、相互協調的自己観と自己卑下呈示行動尺度の 3 下位尺度はいずれも正の相関が示され、相互独立的自己観は「相手への同調」以外の 2 つの下位尺度と負の相関が示された。続いて、自尊感情と自己卑下呈示行動尺度の 3 下位尺度はいずれも負の相関が示され、拒否回避欲求尺度と自己卑下呈示行動尺度の 3 下位尺度はいずれも正の相関が示された。最後に、社会的スキルは「賞賛・依頼への対応」と「会話のきっかけ」の 2 下位尺度との

間には負の相関が示され、「相手への同調」とは有意な相関は示されなかった。

表 2 自己卑下呈示行動尺度の記述統計量および他の尺度との相関係数

	2	3	4	5	6	7	8	M	SD	α
1. 賞賛・依頼への対応	.46 **	.53 **	.28 **	-.25 **	-.39 **	.34 **	-.31 **	3.71	0.70	.86
2. 会話のきっかけ	—	.46 **	.34 **	-.22 **	-.44 **	.28 **	-.29 **	3.04	0.91	.86
3. 相手への同調		—	.31 **	-.12	-.18 *	.31 **	-.14	4.03	0.65	.71
4. 相互協調的自己観			—	-.51 **	-.33 **	.71 **	-.38 **	3.77	0.63	.75
5. 相互独立的自己観				—	.45 **	-.58 **	.44 **	2.92	0.74	.70
6. 自尊感情					—	-.41 **	.54 **	2.58	0.48	.81
7. 拒否回避欲求						—	-.37 **	3.56	0.77	.89
8. 社会的スキル							—	3.19	0.53	.86

** $p < .01$, * $p < .05$

5. 考察

まず、本研究において作成した自己卑下呈示行動尺度は「賞賛・依頼への対応」、「会話のきっかけ」、「相手への同調」という 3 つの下位尺度から構成されることが示された。各下位尺度の内的一貫性は.71— .86 の範囲をとっており、一定の信頼性を有すると言える。また、自己卑下呈示行動尺度の各下位尺度は、相互協調的自己観や拒否回避欲求と正の相関を示し、「自尊感情」と負の相関を示したことなどから、今回作成した自己卑下呈示行動尺度は、一定の関係性を予測していた各尺度に対して、その予測と一致する関係が見られたと言える。このことは、自己卑下呈示行動尺度の妥当性の一部を示すと解釈できる。

しかし、自己卑下呈示行動尺度の下位尺度の一つである「相手への同調」と相互独立的自己観との間に負の相関が示されなかった点や、「相手への同調」と社会的スキルとの間に負の相関が示されなかった点は、予測とは異なる結果であった。社会的スキルと「相手への同調」に相関が見られなかった点に関しては、「相手への同調」は社会的スキルと関係なく行われていることが考えられる。吉田他 (2004) は自己卑下呈示の受け手がどのような反応をするのか検討しており、受け手の反応には「共感反応」と「否定反応」があることを示した。共感反応は「相手自身も同じようにできない、劣っていることを伝える返答」などの理解を示し、同様の卑下を返す反応である。これは本研究において見出された「相手への同調」の特徴と類似している。また、吉田他 (2004) は自己卑下呈示者が周囲の他者から否定反応が返されたと見なすほど、肯定的な自己への見方が形成される可能性があることを示したが、共感反応の場合は明確な意思表示ではないため自己卑下呈示者への影響が弱かったと示唆している。今回の研究で見出された「相手への同調」は、吉田他 (2004) と類似した自己卑下呈示に対する反応であり、明確な意思表示をしていないため社会的スキルとは相関が示されなかった可能性があると考えられる。

次いで、相互独立的自己観は「“個人は他者から分離しており、他者から独立して独自性を主張することが必要”とする自己観」である (高田他, 1996, p.158)。高田他 (1996) は、相互独立的自己観尺度は「独断性」と「個の認識・主張」の 2 つの下位領域によって構成されていることを示した。「独断性」は「他者が自分の考えを何と思おうと気にしない」などの項目からなり、「個の認識・主張」は「自分の意見をいつもはっきり言う」等の項目からなる。この相互独立的自己観と「賞賛・依頼への対応」、「会話のきっかけ」が負の相関を示したのは、こうした自己卑下呈示行動をとることは、自らの独自性を下げる意味を持つためであると考えられる。石黒・村上 (2007) は、自己卑下呈示は相手に対する優位性

を下げる行為であるとしており、自己卑下呈示を行うことで相手との関係に配慮することになる。相手との関係に配慮して自己卑下呈示を行うことは、自己の優位性を下げ、個の認識を主張することを阻害してしまう。そのため、相手との関係に配慮する自己卑下呈示行動と「独断性」や「個の認識・主張」で構成された相互独立的自己観とは負の相関を示したのだろう。しかし、「相手への同調」は、相手が先に自己卑下呈示をしており、それに対して共感反応をするという自己卑下呈示行動である。相手が先に優位性を下げているため、自身の優位性を下げることが「独断性」や「個の認識・主張」に影響しなかったと考えられる。そのため、「相手への同調」と相互独立的自己観の間には有意な相関が示されなかったのではないだろうか。このように、本研究において得られた結果については一定の解釈は可能であるものの、いずれも一考察に過ぎず、本研究で作成された自己卑下呈示行動尺度の妥当性が十分に示されたとは言いがたい。

本研究において、自己卑下呈示行動には3つの側面があると示されたことは、今後の自己卑下呈示を扱う研究において有意義なものであると考える。また、各下位尺度の内的一貫性は一定の値を有しており、信頼性については確認できたと考えられる。ただし、自己卑下呈示行動尺度の妥当性については検討の余地が残されている。特に3つの下位尺度について弁別的妥当性という観点から十分な検討ができなかったのは、そもそも自己卑下呈示行動がどういった側面を有するのかという点についてあらかじめ予測できず、この点を検討するための尺度を用意することが困難であったためである。

したがって、今後の課題として、自己卑下呈示行動尺度の3つの下位尺度の弁別的妥当性や再検査信頼性の検討が挙げられる。また、実験室実験などを行い、本研究で作成した自己卑下呈示行動尺度が、実際に表出される自己卑下呈示行動を予測できるか否かについても検討することで、様々な角度から妥当性の検証を進めていきたい。

5. 参考文献

- Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Hutton, D. G. (1989) Self-presentational motivations and personality differences in self-esteem. *Journal of Personality*, 57:547-579
- 福島 治 (1996) 自己呈示：自己概念と社会的状況の相互作用 東北大学博士学位論文 (未公開)
- 原田 純治・林 南実 (2017) 属性あるいは能力賞賛に対する自己卑下的呈示に関する研究 長崎大学教育学部紀要, 3:141-149
- 樋口 匡貴・川村 千賀子・原 郁水・塚脇 涼太・深田 博巳 (2007) 対人印象に及ぼす自己卑下呈示の効果の規定因 広島大学心理学研究, 7:103-108
- 石黒 格・村上 史朗 (2007) 関係性が自己卑下的自己呈示に及ぼす効果 社会心理学研究, 23:33-44
- 菊池 章夫 (1988) Social Skill 尺度の作成 東北心理学研究, 38, 67-68.
- 小島 弥生・太田 恵子・菅原 健介 (2003) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11:86-98
- Leary, M. R. (1996) *Self-presentation: Impression management and interpersonal behavior*. Boulder, CO: Westview.
- Leary, M. R. & Downs, D. L. (1995) Interpersonal functions of the self-esteem motive: The self-esteem system as a sociometer. In M. H. Kernis (Ed.) , *Efficacy, agency and self-esteem* (pp.123-144) . New York: Plenum.
- Markus, H. R & Kitayama, S. (1991) Culture and the self : Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98:224-253
- 村本 由紀子・山口 勸 (1994). 自己提示における自己卑下・集団高揚規範の存在について 日

本社会心理学会第 35 回大会発表論文集, 222-225

村本 由紀子・山口 勸 (1997) もうひとつの self-serving bias: 日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕傾向の共存とその意味について 実験社会心理学研究, 37:65-75

Rosenberg, M. (1965) Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press.

澄川 采加・稲垣 勉 (2019) 有能感の 4 類型と返礼行動の関連——仮定型に注目して—— 教育テスト研究センター年報, 4:69-71

高田 利武 (2000) 相互独立的-相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, 8: 145-163

高田 利武・大本 美千恵・清家 美紀 (1996) 相互独立的-相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成 奈良大学紀要, 24:157-173

山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30:64-68

吉田 綾乃・浦 光博・黒川 正流 (2004) 日本人の自己卑下呈示に関する研究——他者反応に注目して—— 社会心理学研究, 20:144-151

吉田 寿夫・古城 和敬・加来 秀俊 (1982) 児童の自己呈示の発達に関する研究 教育心理学研究, 30:120-127

付記

本研究の一部は、九州心理学会第 79 回大会において発表された。本研究に快くご協力を賜りました大学生・大学院生の皆様に心からお礼申し上げます。

